



2万人近い客が訪れる「いなり楽市」

❖沿革

豊川地区商店街は、江戸時代初期に豊川稲荷の門前町として発展し、栄えてきた商店街である。江戸～明治～大正～昭和初期の時代、豊川稲荷への参拝の際には、交通の便の悪さから一泊するのが慣習であり、夜間においても宿泊客を相手とした飲食店・土産物店・旅館などが繁盛し、活気づいていた。



昭和30年代の商店街の様子

その後、高度経済成長期に入ると東海道本線や東名高速道路が開通し、遠方から気軽に豊川稲荷に参拝できるようになり、門前町である当商店街はさらに賑わいをみせた。それに伴い、飲食店・土産物屋・旅館・豊川稲荷に納める揚げ屋や八百屋が所狭しと立ち並び、商店街の規模は大幅に拡大していった。また、全盛期は昭和40年代頃で、当商店街は人混みがすごく、歩けないほどであった。

平成に入ると活気は緩やかに衰退し、更に、平成10年頃になると状況は一変した。日本経済のバブル崩壊の影響が広がり、国民全体がレジャー等の娯楽を控える風潮となり、豊川稲荷を訪れる観光客も減少していった。更に時代の流れで、日本人の宗教に対する信仰心の低下が更なる拍車をかけ、全盛期に比べ豊川稲荷への参拝客も大幅に減っていった。こうして当商店街は衰退期を迎えることになった。

以下では、「いなり楽市」というイベントを中心に、豊川地区商店街の活性化に向けた取組をご紹介します。

❖商店街を取り巻く環境

豊川地区商店街は豊川稲荷表参道発展会、豊川商店街振興組合、豊川門前通商店街振興組合、稲美会等の組織が活動を行っている。

豊川稲荷の門前町という好立地条件にあり、一般的な他の商店街に比べ、客足は元々多いほうであると思われる。当商店街の来客数については、初詣の1月に最も集中し、地元住民のみならず、近郊・遠方より訪れる来客者の割合が大きく、3が日では100万人を超えるほどだ。

しかしながら、日本経済の低迷により、平成10年頃より平常時における豊川稲荷の参拝客数は減少し、当地区の活気を少しずつ奪っている。また、観光客向けの店舗が多く立地しているものの、地域住民が集う商店も立ち並び、それらの商店では、全国の商店街衰退の一因となっている「大型小売店舗や複合商業施設に客足を取られる」という影響も受け、厳しい環境に置かれている。

また、平成25年に豊川市内で行われたまちおこしイベント「B-1グランプリ」により地域の知名度があがったことにより、当商店街の来客数は増加傾向にあり、今後も継続していきたいところだ。



客足が最も集中する1月の初詣

取組

いなり楽市



イベント



連携・協働

❖取組を開始したきっかけ

近年、当商店街は豊川稲荷の門前町であるという特徴から、初詣時期を商いの拠所としていたが、その繁盛期である1月の来客数でさえも、徐々に減ってきていた。そこで、危機感を感じた組合員は、門前通りを基本として成り立つ「表参道発展会」の会合にて平常時の閑散とした状

況をどう打開すべきか等の議論を交わした。その結果、「昔のような賑わいを年間を通して取り戻したい」という思いが組合員の中で強くなり、若手店主を中心に据え、平成14年に生まれたイベントが「いなり楽市」だ。

▶マップ付きのパンフレット

取組の概要 >>>>

いなり楽市は第1回目が開催されて以降、初詣時期以外にあたる3月～11月の毎月第4日曜日に門前通りをメイン会場として、豊川稲荷周辺で開催している。イベントの好評により、平成20年以降来客数は毎回2万人にも及ぶ。

また、コンセプトを「ちょっとレトロな異空間」とし、そこには当商店街を訪れることで、昭和の古き良き時代を思い出して頂きたいという思いも詰まっている。

開催時には、門前通り周辺を車道規制して歩行者天国とし、門前町という昭和の雰囲気を活用して元気軒下戸板市・チンドン屋行列・大道芸・地元小学生のよさこい祭りなど、数々のイベントを実施している。また夏の夜には、キリンビールと提携したビアガーデンを催しており、あらゆる年齢層が楽しめる仕掛けを展開している。



いなり楽市でのイベントの様子

また、当商店街は平成25年に豊川市内で開催された「B-1グランプリ」にあわせ、アーケードの美装化や耐震改修を実施し、「B-1グランプリ」での好評価に貢献するとともに、商店街のイメージアップを図っている。